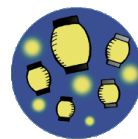




自らの脳を食べてしまう生き物がいる!?



朝日新聞“天声人語”(R6.7.25)に、次のようなコラムが載っていました。

「人間20歳をすぎたら、自分の脳は自分で育てろ。」知の巨人、立花隆はよくそう語っていた。成人たる者、知的な刺激を脳に与え、常に鍛えるべしとの言葉に、うなずく人もいるだろう。では、その脳を、大人になると自ら食べてしまう生物もいると聞けばどうか。ホヤである。あの橙色のグニャッとした海の生き物である。オタマジャクシ形の幼生は脳を使い、すみ家を探して水中を泳ぐ。ここという場所を見つけると、でんと動かすを決め、脳を食物にするという。何とも不思議だ。ホヤの専門家、広島修道大学の長谷川助教に尋ねてみた。なぜ、そんな生き方をするのでしょうか。答えはシンプルだった。

「ほとんど脳が必要ないからです。動かないので…」脳は多くの栄養を必要とする。動かないなら、考えなくていい。脳はなくていい。それがホヤの生き残り戦略だという。

「動けないのではなく、動かないことを選んだ生き物なのだと思います。研究者としては、そこが面白い」

脳を発達させる戦略で繁栄してきた人類から見れば、逆転の発想である。それでいて、ホヤは無脊椎動物のなかでもっともヒトに近い生き物だそうだ。………(後略)

脳の大きさは動物により様々です。全体重に占める脳の重量の割合を脳化指数と呼ぶそう、当然のことながら、その数値が大きいほど知能が高いようです。

ヒトを筆頭に、イルカ⇒チンパンジー⇒サル⇒クジラ⇒カラス⇒イヌ⇒ネコ…の順に脳化指数が高いそうです。



ただ、私がこの記事に注目したのは、脳化指数ではなく、成長したホヤが自らの脳を捨てた理由です。脳を働かせるためには、大量の栄養(エネルギー)が必要だから、考える必要のない大人のホヤは、省エネのために脳を食べてしまうという点です。

わたしたちは、運動や肉体労働などで身体を動かす前には、しっかり食べたり飲んだりしてエネルギーチャージすることは、普段から心がけていると思います。

同じように、頭をしっかりと働かせて学習したり作業をしたりする際にも、我々が想像する以上に大量のエネルギーが必要になるということです。

身体も脳も日々成長し続けている子どもたちは、大人以上に規則正しく3食を食べることが大切ですし、授業が始まる前に朝食を食べることの重要性を改めて感じました。

R6 サマーセミナー



22日(月)から4日間、サマーセミナーを実施しました。3年生以上の児童を対象に、8:30から10:05までたくさんの地域ボランティアさん、学校運営協議会委員さん、中高生ボランティアさん、平生小教員からほぼマンツーマンに近い手厚い指導を受けながら、充実した学習会になりました。分からないことにすぐアドバイスをもらったり、時には世間話をしたりと、学習の楽しさを感じているようでした。皆様のご協力に感謝します。

